

個人的目標研究の動向

東京大学教育心理学研究室 角 野 善 司

Review of the Studies on Personal Goals

Zenji SUMINO

Recently idiographic/nomothetic goal concepts have become a subject of attention. These concepts are called *personal goals*. This paper reviewed the concepts of personal goals (e. g. *current concern* (Klinger, 1977), *personal project* (Little, 1983), *life task* (Cantor & Kihlstrom, 1987), *personal striving* (Emmons, 1986)) and the studies on personal goals. Based on this review, directions for future research were discussed.

目 次

- I. 個人的目標
- II. 個人的目標のとらえられ方
 - A. 個性記述的かつ法則定立的な目標
 - B. 個人的目標の具体性—抽象性, 短期性—長期性
 - C. 個人的目標の諸概念
 - D. 個人的目標の構造
- III. 個人的目標を用いた研究
 - A. 個人的目標と感情
 - B. 個人的目標と思考・行動
 - C. 個人的目標と自己概念
 - D. 個人的目標と健康
- IV. 個人的目標研究の問題点と今後の方向性
 - A. 階層構造をもった目標システム
 - B. 自己調整過程の中での目標というとらえ方
 - C. 個人的目標の内容領域に分けての研究
 - D. 臨床場面への応用
 - E. 近接分野としての時間的展望・未来志向性研究

I. 個人的目標

人がしようとすることは、多種多様・各人各様である。この多様性を考慮に入れたうえで“しようすること”をとらえ、主に、それが感情・思考・行動・健康などに及ぼす影響を探らうとするのが、個人的目標 (personal goal) 研究の流れである。これまでに、current concern (Klinger, 1977), personal project (Little, 1983), life task (Cantor & Kihlstrom, 1987), personal striving (Emmons, 1986) などの個人的目標概念が、提唱されてきた。

近年、人格心理学・社会心理学の分野において、目標概念が注目されてきており、そうした中で個人的目標がしばしば採りあげられている。例えば、Buss & Cantor (1989) は、人格心理学は重大な転換期に来ていると考え、人格心理学における新しい概念・テーマの紹介、諸研究の整理統合を図っているが、その中で、personal project (Little, 1989), life task (Norem, 1989), personal striving (Emmons, 1989b) などが論じられている。また、Pervin (1989) は、このような人格心理学・社会心理学の分野における目標概念への関心の高まりと、行動を目的的と見なす見方が広く受け入れられつつあることを受けて、この分野における目標概念の有用性を論じており、そこで採りあげられた目標概念にも、life task (Cantor & Langston, 1989), personal striving (Emmons, 1989a) などが含まれている。

このような流れを受けて、個人的目標研究の現況を概観し、今後の研究の採るべき方向性について考察を加えていくことを本論文の目的とする。

II. 個人的目標のとらえられ方

本章では、これまでの研究において個人的目標がどのようにとらえられてきたかについて、見ていくこととする。

A. 個性記述的かつ法則定立的な目標

冒頭で述べたとおり、個人的目標は、各個人によってその抱く目標の内容は異なるものであるということを重視しており、その点で、個性記述的な (idiographic) 概念である。が、同時に、各目標について重要性・成功可

能性などの評定をさせ、その評定値を用いることで個人間の比較を行うことが可能であり、その点で、個人的目標は法則定立的にも (nomothetic) 扱われうる。このように、個人的目標は、個性記述的かつ法則定立的という、併存しがたい性質のいずれをももっているという特徴がある (なお、個人的目標という用語は、このような目標以外の目標に対しても用いられることがあるが、本論文では、この個性記述的かつ法則定立的な目標に限定して用いることとする)。

B. 個人的目標の具体性—抽象性, 短期性—長期性

個人的目標は多種多様なものであるが、その多様性は、目標の具体性—抽象性, 短期性—長期性といった点にも現れている。

1. 個人的目標の具体性—抽象性

目標と実際の行為との結びつきの強さ、すなわち、何を行うことがその目標を遂行することになるのかということの明確さに、目標の具体性—抽象性は現れる。例えば、“人の役に立つことをすること”と“老人介護にボランティアとして参加すること”の2つの目標を比較すると、前者はより抽象的な目標、後者はより具体的な目標としてとらえることができよう。

2. 個人的目標の短期性—長期性

目標達成のレンジの長短、すなわち、目標達成までの時間の長さによって、目標の短期性—長期性は決定される。例えば、“明日デートに行くこと”と“20年後にマイホームを建てること”とを比較すれば、前者はより短期的な目標、後者はより長期的な目標と言える。なお、この短期性—長期性は、角野 (1992a, b, 1993) が採りあげているが、それ以前の研究では、あまり意識されてこなかった。稀な例として、Wadsworth & Ford (1983) が考慮に入れてはいるが、しかし、これも短期的・特殊的一長期的・一般的という対応づけがされており、短期性—長期性と具体性—抽象性が分化されていない。

C. 個人的目標の諸概念

これまでに提唱されてきた個人的目標についての4つの主要な概念の定義と例を、Table 1 に示した¹⁾。

これらの個人的目標を用いた研究は、一定の共通した手順に従っている。まず、個人的目標の概念の定義と例を示すことにより、被験者に個人的目標についての理解を深めさせ、そのうえで目標を挙げさせる。こうして得られた各目標の内容は個性記述的に扱われる。そして、多くの研究では、その後各目標について重要性・成功可能性・困難度などの次元から評定をさせている。ここで得られた各目標についての評定値は1つの変数として

Table 1 個人的目標の諸概念の定義およびその例

current concern

“ある特定の目標を遂行することにコミットするようになった時点と、その目標を完了した時点もしくはその目標の遂行を放棄し目標から解放された時点との間の、有機体の状態” (Klinger, 1987, p.33-34)

〈例〉クリーニング屋にズボンを取りに行くこと／歯医者予約をとること／体重を減らすこと／明日昼食を食べること／新しい知人と仲良くなること／今度の夏にヨーロッパを旅行すること

personal project

“人がそれについて考え、計画を立て、実行し、(常にではないが) 達成するものごと” (Little, 1983, p.303)

〈例〉ボーイフレンドと舞踏会へ行くこと／アルバイトを見つけること／休みの日に買い物をする事／心理学のレポートを書き上げる事／シャイネスを克服すること／老後は悠々自適に暮らすこと

life task

“人が、人生の特定の時期において、自分が取り組みその解決に精力を注いでいると見なしている課題”

(Cantor & Kihlstrom, 1987, p.4)

〈例〉よい成績をとること、学業で成功をおさめること／目標を立てること、将来の計画を立てること／友人をつくること、他者とうまく付き合っていくこと／(家族から離れて)自立すること／アイデンティティを明確にすること、“自分を見つけること”／時間をうまく使うこと、学業と付き合いのバランスをとること

personal striving

“目標への努力の、個人に特有の一貫したパターン”

(Emmons, 1989a, p.92)

〈例〉もっと他者から愛されようとする事／ものごとを能率的にしようとする事／もっと人から尊敬されようとする事／自分を知的に見せる事／人のことを悪く言わないようにする事

扱われ、他の変数との関連を見る際などに用いられる。この点で、各目標についての様々な次元からの評定値は法則的定立的に扱われる（研究により用いられる評定次元は異なる）。また、個人的目標の内容はカテゴリー分類して用いられる場合があり、その場合には、目標のカテゴリー（内容領域）も法則定立的に扱われる。

以下、本節では、各概念について細かく見ていきながら、概念間の性質の異同等について論じていくこととする。

1. current concern (Klinger, 1977)

Klinger (1977) は、目標が思考の流れや空想などの認知的活動や行為に及ぼす影響を探ることを目的として、current concern という概念を提唱した。

Table 1 の定義に見るように、current concern とは、ある目標を達成しようと思いはじめてから、その目標をやりとげるまでの、またはその目標を放棄するまでの動機づけの状態を指す。後述の3つの概念と異なるのは、このように current concern 自体は動機づけの状態を指すものであり、目標そのものを指すわけではないことである（しかし、便宜上 current concern を目標として扱っている研究者も多い（Ruehlman, 1985など））。

また、比較的短期間の認知的活動・行為への影響を探るという目的から、current concern をもつ目標には、具体的かつ短期的な目標が多い傾向にある。

2. personal project (Little, 1983)

Little (1983) は、“社会的・物理的・時間的文脈の中で的人格の研究のための新しい分析のユニット” (p.273) として、personal project という概念を提唱した。

personal project には、“猫を外に出すこと”といった非常に限定的な行動から、“自分のガンに対処すること”“大西洋を航海すること”といった大計画までが含まれる。それは、一人で行おうとすることや他者と協力して行おうとすること、1回限りのことや終生コミットしつづけること、自らの抱負を表現しているものや不快ながらも外部から要求されているものなどをも含む、広範囲に及ぶ概念である（Little, 1987）。

目標の具体性—抽象性という点から personal project を見ると、“自分の信念に従うこと”といった抽象的な目標も含まれるが、総じて、具体的な目標が多い。これは、この概念の提唱の目的に見るように、Little が、文脈や状況の中で変化しうる目標として personal project をとらえていることによるものと考えられる。また、目標の短期性—長期性という点では、短期的目標・長期的目標にも含まれている。

3. life task (Cantor & Kihlstrom, 1987)

Cantor & Kihlstrom (1987) は、各個人のもつ目標は、その個人特殊のものであるだけでなく、年齢（および文化などの社会的文脈）の影響を受けて（age-graded）普遍性ももつと考える傾向が強く、life task という概念を提唱した。この life task は、本節で紹介している他の3つの概念に比べ、個人的目標を発達課題的にとらえていると言え、“社会的・文化的に規定された、年齢に応じた‘計画表（agenda）’の、個人によって定義されたバージョンと見なすことができる”（Cantor & Zirkel, 1990, p.150）と考えられている。また、Cantor らは、大学進学、結婚などの人生の移行期（life transition）には、社会的・文化的な規範的要求が個人に対し比較的明確に示されるために、そして、自分の生活や性格にポジティブな変化を起こそうとするために、他の時期に比べ、新しい目標を抱きやすく、また、目標が意識に上りやすくなると考えている。そのため、大学進学時の学生に対する一連の縦断的研究など（Cantor, Norem, Niedenthal, Langston, & Brower, 1987; Zirkel & Cantor, 1990; Zirkel, 1992）、人生の移行期にあたる人々を対象にした研究が多く行われている。

なお、Table 1 に示した例は、予備研究から作成された、男女大学生の life task の6つのカテゴリーである（Cantor et al., 1987; Zirkel & Cantor, 1990; Zirkel, 1992）²⁾。他の個人的目標研究では、目標のカテゴリー分類は研究者の手によってされているが、life task を用いた研究では、被験者に各々の life task を自由記述で挙げさせようとして、カテゴリーを提示し、被験者自身に分類させている。

4. personal striving (Emmons, 1986)

Emmons (1986) は、以上の3つの概念が、文脈や状況の影響を受けやすいために安定性・一貫性に欠ける点で、人格の研究に用いるには不適當であると考え、“さまざまな状況において達成したいと思う、その人にとって典型的なタイプの目標”（Emmons, 1989a, p.92）として、personal striving という概念を提唱した。

この概念は、法則定立的な研究で扱われている達成動機・親密性動機などの動機概念と前述の3つの個人的目標概念との隔たりを埋める概念としてとらえられ、“法則定立的な動機の各個人による事例化（instantiation）”（Emmons, 1989a, p.95）と位置づけられている。そのため、personal striving は、他の個人的目標概念に比べ抽象度が高い傾向にあり、Emmons は、personal striving を他の3つの概念の上位に位置し、その人にとって機能的に等価な一群の下位目標を生み出すものとして考えて

法則定立的な動機

personal striving

current concern/personal project/life task

行為のユニット

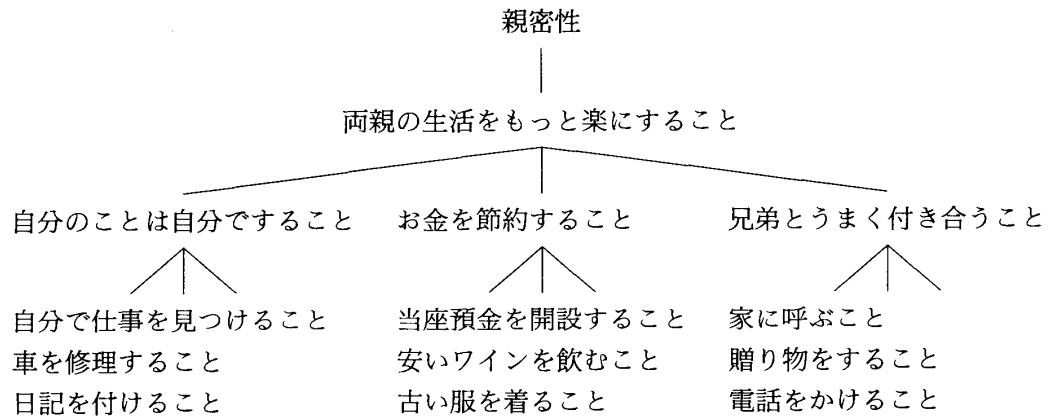


Figure 1 Emmons による、法則定立的な動機と個人的目標の諸概念の階層構造の例 (Emmons, 1989a, p.93)

いる (Figure 1)。例えば、“身体的に魅力的になること”という personal striving は、下位目標として、“運動をすること”“服に工夫を凝らすこと”“髪形を変えること”といったいくつもの具体的目標を生み出し、それらの具体的目標のいずれの達成によっても満足されるとしている。

D. 個人的目標の構造

個人的目標の研究者たちは、各個人のもつ個々の目標は必ずしも相互に独立しているとは限らない、ととらえてきた。

前節で紹介した4つの個人的目標概念の提唱者を含め、多くの研究者は、目標は、Figure 1のように、上位目標と下位目標との目標—手段関係が繰り返され、下位目標のさらに下位の目標といった形で、実際にとられる行動のレベルまでの階層構造に体制化されている、とする見解で一致している (Pervin, 1989)。なお、目標の階層構造は、1つの上位目標がその手段となる下位目標を複数もちうるという、Figure 1に示されたような“梯子状”の構造としてとらえるより、1つの下位目標が複数の上位目標に対して手段としての役割を果たすこともありうるという“格子状”の構造としてとらえる方向に進むべきである、とする意見もある (Little, 1989)。

また、Little や Emmons は、個人的目標は相互に関連してシステムを形成し、その人の日常の活動はそのシステムに沿うように系統立てられると、考えている (Little, 1983; Emmons, 1986)。そこで、彼らは、1つの個人的目標の遂行が他の1つの個人的目標の遂行に、ポジティブな影響を与えるかネガティブな影響を与えるかあるいは全く影響を与えないかを、被験者が挙げた個人的目標の全ての対について評定させ、それをシステム内の葛藤の指標として用いている。

III. 個人的目標を用いた研究

以上で触れた個人的目標を用いた研究が、感情・思考・行動・自己概念・健康などの分野で積み重ねられている。本章ではそのような研究例をいくつか紹介する。

A. 個人的目標と感情

個人的目標と感情との関係に関する研究には、あるパターンの感情をもちやすい人はどのような個人的目標をもつ傾向があるか、という観点からの研究が多い。

Ruehlman (1985) は、抑うつ・非抑うつ的な大学生に current concern を挙げさせ、それを比較した。その結果として、抑うつ的な学生は、非抑うつ的な学生に比べ、自分のもっている current concern をポジティブに見る傾向が弱いということを見いだした。

次に、Emmons & King (1989) は、personal striving のシステムの複雑性と感情の反応性との関係について調べた (personal striving のシステムの複雑性の指標には、personal striving の全対についての非類似性の評定値と、それぞれの遂行が互いに影響を及ぼさない対の数との2つが、また、感情の反応性の指標には、気分の多様性および感情の強さが、それぞれに用いられた)。その結果、感情の反応性の高い人は複雑性が高い personal striving システムをもつ、としている。

また、Emmons (1989a) は、両価性 (ambivalence) の高い personal striving には、“嫉妬心を抑えること”“自分を正直に表現すること”など、情動の表出に関するものが多いことを見いだしている。

B. 個人的目標と思考・行動

個人的目標と思考などの認知的活動との関係について

は、Klinger らが current concern を用いて一連の研究を行っている。

Klinger, Barta, & Maxeiner (1980) は、思考の内容に current concern が及ぼす影響について研究し、目標が思考に上る頻度は、目標へのコミットメント、目標の誘因価などから予測されるという結果を得ている。そして、Hoelscher, Klinger, & Barta (1981) は、睡眠中の被験者に、その被験者の current concern と関連のある言語刺激と関連のない言語刺激とを聞かせたところ、current concern と関連のある言語刺激の方が有意に夢に混入していることを見だし、睡眠中でも目標が認知的活動に影響を及ぼしているとしている。

一方、行動との関係についても、Klinger (1987) が、被験者の日記を分析し、current concern がその後の行動を有意に予測するとしている。

また、Emmons & King (1988) は、personal striving の葛藤と両価性の高さは、それについて考える時間とは正の相関が、また、実際にそのための行動をする時間とは負の相関があることを見いだした。そして、この結果は、personal striving の葛藤と両価性は、行動を妨げ、反芻を促進するものであることを示していると結論づけている。

C. 個人的目標と自己概念

Cantor らは、life task を用い、家庭や高校での生活から大学での生活への移行期にある学生を対象に、一連の縦断的研究を行っている。その中で、Cantor et al. (1987) は、達成的・対人的な life task についての現実—理想の自己概念の不一致が、その分野でのストレスや満足に影響していることを示している。また、Zirkel & Cantor (1990) は、“家族から離れて、自立すること”に深く関与している者は、学業に関する life task も、自己の発達という観点からとらえる傾向があることを見いだしている。

D. 個人的目標と健康³⁾

個人的目標と心理的・身体的健康との関係を扱った研究は、多く見受けられる。その多くは、個人的目標が健康に及ぼす影響を探るといった形の研究である。

Emmons (1986) は、重回帰分析により、personal striving に対する様々な次元の評定から、主観的幸福 (subjective well-being) の予測を試みた(ここで、主観的幸福は、うれしい・楽しいなどのポジティブな感情、落ちこんだ・怒った・欲求不満などのネガティブな感情(の少なさ)、人生に対する満足 (life satisfaction) の

3要素からなるものとしてとらえられている (Diener, 1984))。その結果、ポジティブな感情は、personal striving の価値 (成功した場合のうれしさおよび失敗した場合の悲しさ)、それまでの達成度、必要な努力から予測され、ネガティブな感情は、成功可能性の低さ、両価性、personal striving 間の葛藤から予測された。また、人生に対する満足は、personal striving の重要性、何もしなかった場合の成功可能性、personal striving 間の葛藤の低さから予測された。

次に、Palys & Little (1983) は人生に対する満足の高い群と低い群との personal project の相違について判別分析を行った結果、人生に対する満足が高い人は、楽しく、困難度が低く、短期的に見て重要である personal project に深く関与していることを見いだしている。

また、personal striving の葛藤・両価性が健康に及ぼす影響を検証することを目的とした Emmons & King (1988) は、personal striving の葛藤・両価性と、ネガティブな感情、抑うつ、不安、心身症傾向との間に有意な正の相関を得ている。また、personal striving の葛藤は、過去1年間の保健センターへの来所回数、病気の回数とも有意な正の相関がある、としている⁴⁾。さらに、personal striving の葛藤・両価性が、1年後の心身症傾向を有意に予測することも見いだしている。

この他には、Ruehlman & Wolchik (1988) による、personal project に関連するソーシャルサポートおよび社会的妨害が心理的健康に及ぼす影響の研究、Omodei & Wearing (1990) が、主観的幸福の生じる過程についての理論構築のために personal project を用いた研究、Emmons (1991) の、personal striving とライフイベントとが心理的・身体的健康に及ぼす影響の研究、Emmons (1992) の、被験者の挙げる personal striving の抽象度と心理的・身体的健康との相関についての研究などがある。

なお、以上の4分野以外で個人的目標が用いられた例としては、ライフスタイル (Horley, Carroll, & Little, 1987)、生理的喚起 (Nikula, Klinger, & Larson-Gutman, 1993)、ライフイベント (Cantor et al., 1991) との関係についての研究などが挙げられる。

IV. 個人的目標研究の問題点と今後の方向性

以上、個人的目標研究の現況を概観してきた。本章では、従来の研究の問題点を挙げ、それを踏まえて今後の研究の方向性について論じていくこととする。

A. 階層構造をもった目標システム

第II章D節で触れたとおり、個人がもっている目標は全体として階層構造をなしているという考え方が、研究者の間で広く受け入れられている。また、目標をシステムとしてとらえる見方もある。しかし、“階層構造をもった目標システム”という考え方は、十分にされてこなかった。

目標の階層構造は、しばしば言及され、Figure 1 のような形で図式化されもしているが、それがどのような働きをするかということについては、これまで十分な理論的検討がされてきたとは言いがたい。従来の目標システムの考え方に言え、Little, Emmonsとも階層構造を念頭に置いてはいる。が、実際の研究でシステムをとらえる指標を採る際には、目標を非階層的に、一律に同水準のものとして、目標相互間の関係を扱うにとどまっておらず、personal project どちらの間、personal striving どちらの間、あるいはpersonal striving と personal project との間に考えられる、上位目標—下位目標、目標—手段の関係を、階層的なシステムとしてとらえることができずにいる。この他に、上位目標—下位目標間の関係を階層的なシステムとしてとらえようとした研究は、すでにいくつかあるが、残念ながら、これらは理論面で不十分である（長期的・一般的目標—短期的・特殊的目标 (Wadsworth & Ford, 1983), 法則定立的な動機—personal striving (Emmons & McAdams, 1991), 長期的目標—短期的目標(角野, 1992a, b)など)。

今後は、抽象的目標—具体的目標、長期的目標—短期的目標のそれぞれの間の目標—手段関係を中心に、この“階層構造をもった目標システム”という考え方を推し進めていくべきであると考えられ、十分な理論的検討と指標の採り方の工夫をしていかなければならない。

B. 自己調整過程の中での目標という考え方

第III章で触れた従来の研究は、相関研究が少なくないが、概して因果の方向についての理論的検討が充分とは言えない。

最近、Cantor & Fleeson (1991) や Karoly (1991, 1993) が、自己調整過程の中で目標をとらえることを提唱している。従来のように単に1変数と1変数との間の相関関係として目標と感情・思考・健康などとの関係を論じるのではなく、このようにより大きな自己調整過程の中での目標の位置・働きを検討し、その検討を踏まえ、より巨視的に目標と他の変数との関係を考えていくといった理論展開を図り、そのうえでの実証的研究を重ねていくことが重要である。

C. 個人的目標の内容領域に分けての研究

Cantorらは、life task を、個人間に共通する発達課題の各個人によるバージョンととらえている。そのため、life task の内容は個人特殊であるだけでなく年齢の影響を受けて普遍性をもつと考え、対人関係・学業などの、life task の各内容領域が各個人にとってもつ意味の普遍性を重視している。そこで、研究の当初より、life task をその内容でカテゴリーに分類し、内容領域別に検討を行ってきた。

一方、それに対し、Little や Emmons は、personal project や personal striving の内容について、普遍性より各個人による特殊性の方に重点をおいている。そして、同じ内容領域であっても各個人にとってのその内容領域の意味づけは全く同じではない、と考える傾向が強く、内容領域に分けた研究にCantorらほど大きな意味を見いだしていない。そのため、内容の相違を問わずに、個人的目標に対する様々な次元からの評定値を中心に用いた研究を、多く積み重ねてきた。

この2つの立場は、個人的目標の内容領域のもつ意味の、普遍性と各個人による特殊性との、どちらをより重視するかという程度の違いである。内容領域に分けることにより現れてくる情報もあれば、落とされてしまう情報もある。また、その逆に、内容領域に分けないことにより明らかになる情報もあれば、隠れてしまう情報もある。どちらの立場が適切かということは一概には言えず、研究の主眼を何におくかにより、その目的に照らし合わせて個人的目標の内容領域の取り扱いを判断すべきだろう⁵⁾。

D. 臨床場面への応用

個人的目標を臨床場面に応用しようとする試み・提言が、Wadsworth & Ford (1983), Little (1989), Emmons (1989a) などによってなされている。彼らは、臨床場面への応用可能性として、主に以下の三点を採りあげている。

まず、ふだんは必ずしも明確に意識されていない個人的目標を言語化することにより自省が促され、クライアント自身による問題の発見に結びつく、ということが挙げられる。これは、個人的目標を用いた研究で、被験者のコメントとして、しばしば得られてきたものである。

次に、カウンセラーは、クライアントに個人的目標の目標—手段関係を問うことで、手段となる下位目標を立てることができていない上位目標を見つけることができる。それを扱いやすい下位目標に分け、個々の下位目標に焦点を当て、その実現のための行為を明らかにすると

いった形の介入を行うことが可能であろう。また、クライアントの個人的目標の目標—手段関係を図式化し、それを示すといったことを行えば、第一点と同様に、クライアント自身で問題を発見し、洞察を深めることにも役立つであろう。

最後に、クライアントの非合理的信念が、“全ての人から好かれること”“何ごとにも完璧にやり遂げること”といった個人的目標に現れる可能性がある。このような場合、カウンセラーは、その個人的目標の非合理性を突き、論理的思考の誤りを示すことができよう。

カウンセラーが、以上の三点と、個人的目標が健康に及ぼす影響についての研究で蓄積されつつある知見とを踏まえ、クライアントの個人的目標のもち方を、健康にポジティブな影響を与えるもち方に変えるよう働きかけていけば、有効な結果が得られるだろう。臨床場面で個人的目標が活用されることは、個人的目標が健康に及ぼす影響を扱う研究者に共通する、臨床心理学への期待である。

E. 近接分野としての時間的展望・未来志向性研究

個人的目標研究の流れとは全く独立して行われてきた、時間的展望 (time perspective)・未来志向性 (future orientation) の研究においても、近年、目標に対する関心が高まってきており (Nurmi, 1992; Tsuzuki, 1992; 都筑, 1993), 両研究分野は非常に近接した分野になりつつある。すでに、時間的展望・未来志向性の流れを汲む研究では、Salmela-Aro, Nurmi, Aro, Poppius, & Riste (1993) が personal project を用いた研究を行っているが、今後の研究の発展のためには、両研究分野のこのような相互交流が重要な意味をもってくると考えられる。

(指導教官 井上健治教授)

注

- 1) 最近, personal project の提唱者でもある Little (Little, 1989; Little, Lecci, & Watkinson, 1992) が, これら 4 つの個人的目標概念の全てを含む概括的な概念として, personal action construct (PAC) unit を提唱している。しかし, PAC unit による個人的目標のとらえ方は, personal project の影響が色濃く, PAC unit は, 他の研究者には受け入れられていない。
- 2) その後, 女子大学生のみ (女子学生クラブ (sorority) に所属) を被験者にした Cantor, Norem, Langston, Zirkel, Fleeson, & Cook-Flannagan (1991) と Cantor, Acker, & Cook-Flannagan (1992) の 2 研究では, “アイデンティティを明確にすること, ‘自分を見つけること’” “時間をうまく使うこと, 学業と付き合いのバランスをとること” の 2 つに代わり, “誰かに夢中になること, 親密なデート相手を見つけること” “女子学生クラブのメンバーであること” “体の維持, ダイエット・運動・健

康” の 3 つを用い, 計 7 カテゴリーに分類している。

- 3) ここで言う “健康” には, “well-being” も含めて考える。
- 4) personal striving から健康への影響を検証するというこの研究の目的に照らし合わせれば, 時間的に考えると現在の personal striving はそれ以前の身体的健康には影響を及ぼしえないことから, 現在の personal striving の葛藤と, 過去 1 年間の保健センターへの来所回数, 病気の回数との間の相関を論じることは意味がない。このことに見るように, 変数の選択に際しては, その変数が過去—現在—未来のいずれの時点のものであるのかということに, 十分な注意が必要である。
- 5) Little や Emmons も, 研究の目的によっては, 内容領域別の分析を行っており (Little et al., 1992; Emmons, 1991), 内容領域に分けることを否定しているわけではない。Cantor らと Little, Emmons との立場の相違は, あくまでも相対的なものである。

引用文献

- Buss, D. M. & Cantor, N. (Eds.) 1989 *Personality Psychology: Recent Trends and Emerging Directions*. New York: Springer-Verlag.
- Cantor, N., Acker, M., & Cook-Flannagan, C. 1992 Conflict and Preoccupation in the Intimacy Life Task. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 644-655.
- Cantor, N. & Fleeson, W. 1991 Life Tasks and Self-Regulatory Processes. In M. L. Maehr & P. R. Pintrich (Eds.) *Advances in Motivation and Achievement*. Vol.7. Greenwich, CT: JAI Press Inc. pp.327-369.
- Cantor, N. & Kihlstrom, J. F. 1987 *Personality and Social Intelligence*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Cantor, N. & Langston, C. A. 1989 Ups and Downs of Life Tasks in a Life Transition. In L. A. Pervin (Ed.) *Goal Concepts in Personality and Social Psychology*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.127-167.
- Cantor, N., Norem, J., Langston, C., Zirkel, S., Fleeson, W., & Cook-Flannagan, C. 1991 Life Tasks and Daily Life Experience. *Journal of Personality*, **59**, 425-451.
- Cantor, N., Norem, J. K., Niedenthal, P. M., Langston, C. A., & Brower, A. M. 1987 Life Tasks, Self-Concept Ideals, and Cognitive Strategies in a Life Transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1178-1191.
- Cantor, N. & Zirkel, S. 1990 Personality, Cognition, and Purposive Behavior. In L. A. Pervin (Ed.) *Handbook of Personality: Theory and Research*. New York: The Guilford Press. pp.135-164.
- Diener, E. 1984 Subjective Well-Being. *Psychological Bulletin*, **95**, 542-575.
- Emmons, R. A. 1986 Personal Strivings: An Approach to Personality and Subjective Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1058-1068.
- Emmons, R. A. 1989a The Personal Striving Approach to Personality. In L. A. Pervin (Ed.) *Goal Concepts in Personality and Social Psychology*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.87-126.
- Emmons, R. A. 1989b Exploring the Relations Between Motives and Traits: The Case of Narcissism. In D. M. Buss & N. Cantor (Eds.) *Personality Psychology: Recent Trends and Emerging Directions*. New York: Springer-Verlag. pp. 32-44.

- Emmons, R. A. 1991 Personal Strivings, Daily Life Events, and Psychological and Physical Well-Being. *Journal of Personality*, **59**, 453-472.
- Emmons, R. A. 1992 Abstract Versus Concrete Goals : Personal Striving Level, Physical Illness, and Psychological Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 292-300.
- Emmons, R. A. & King, L. A. 1988 Conflict Among Personal Strivings : Immediate and Long-Term Implications for Psychological and Physical Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1040-1048.
- Emmons, R. A. & King, L. A. 1989 Personal Striving Differentiation and Affective Reactivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 478-484.
- Emmons, R. A. & McAdams, D. P. 1991 Personal Strivings and Motive Dispositions : Exploring the Links. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **17**, 648-654.
- Hoelscher, T. J., Klinger, E., & Barta, S. G. 1981 Incorporation of Concern- and Nonconcern-Related Verbal Stimuli into Dream Content. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 88-91.
- Horley, J., Carroll, B., & Little, B. R. 1988 A Typology of Lifestyles. *Social Indicators Research*, **20**, 383-398.
- Karoly, P. 1991 Goal Systems and Health Outcomes across the Life Span : A Proposal. In Schroeder, H. E. (Ed.) *New Directions in Health Psychology Assessment. Series in Applied Psychology : Social Issues and Questions*. New York : Hemisphere Publishing Corporation. pp.65-93.
- Karoly, P. 1993 Mechanisms of Self-Regulation : A Systems View. *Annual Review of Psychology*, **44**, 23-52.
- Klinger, E. 1977 *Meaning and Void : Inner Experience and the Incentives in People's Lives*. Minneapolis : University of Minnesota Press.
- Klinger, E. 1987 The Interview Questionnaire Technique : Reliability and Validity of a Mixed Idiographic-Nomothetic Measure of Motivation. In J. N. Butcher & C. D. Spielberger (Eds.) *Advance in Personality Assessment*. Vol.6. Hillsdale, NJ : Erlbaum. pp.31-48.
- Klinger, E., Barta, S. G., & Maxeiner, M. E. 1980 Motivational Correlates of Thought Content Frequency and Commitment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 1222-1237.
- Little, B. R. 1983 Personal Projects : A Rationale and Method for Investigation. *Environment and Behavior*, **15**, 273-309.
- Little, B. R. 1987 Personal Projects and Fuzzy Selves : Aspects of Self-Identity in Adolescence. In T. Honess & K. Yardley (Eds.) *Self and Identity : Perspectives across the Lifespan*. New York : Routledge Kegan Paul. pp.230-245.
- Little, B. R. 1989 Personal Projects Analysis : Trivial Pursuits, Magnificent Obsessions, and the Search for Coherence. In D. M. Buss & N. Cantor (Eds.) *Personality Psychology : Recent Trends and Emerging Directions*. New York : Springer-Verlag. pp.15-31.
- Little, B. R., Lecci, L., & Watkinson, B. 1992 Personality and Personal Projects : Linking Big Five and PAC Units of Analysis. *Journal of Personality*, **60**, 501-525.
- Nikula, R., Klinger, E., & Larson-Gutman, M. K. 1993 Current Concerns and Electrodermal Reactivity : Responses to Words and Thoughts. *Journal of Personality*, **61**, 63-84.
- Norem, J. K. 1989 Cognitive Strategies as Personality : Effectiveness, Specificity, Flexibility, and Change. In D. M. Buss & N. Cantor (Eds.) *Personality Psychology : Recent Trends and Emerging Directions*. New York : Springer-Verlag. pp.45-60.
- Nurmi, J. -E. 1992 Age Differences in Adult Life Goals, Concerns, and Their Temporal Extension : A Life Course Approach to Future-oriented Motivation. *International Journal of Behavioral Development*, **15**, 487-508.
- Omodei, M. M. & Wearing, A. J. 1990 Need Satisfaction and Involvement in Personal Projects : Toward an Integrative Model of Subjective Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 762-769.
- Palys, T. S. & Little, B. R. 1983 Perceived Life Satisfaction and the Organization of Personal Project Systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 1221-1230.
- Pervin, L. A. (Ed.) 1989 *Goal Concepts in Personality and Social Psychology*. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Ruehlman, L. S. 1985 Depression and Affective Meaning for Current Concerns. *Cognitive Therapy and Research*, **9**, 553-560.
- Ruehlman, L. S. & Wolchik, S. A. 1988 Personal Goals and Interpersonal Support and Hindrance as Factors in Psychological Distress and Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 293-301.
- Salmela-Aro, K., Nurmi, J.-E., Aro, A., Poppius, E., & Riste, J. 1993 Age Differences in Adults' Personal Projects. *The Journal of Social Psychology*, **133**, 415-417.
- 角野善司 1992a 大学生の個人的目標, およびその life satisfaction との関係 東京大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 角野善司 1992b 大学生の個人的目標(1)——目標の短期性—長期性, 目標—手段関係についての分析——日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 181.
- 角野善司 1993 大学生の個人的目標(2)——目標の内容についての カテゴリー分析——日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 327.
- Tsuzuki M. 1992 Quality of Personal Future Goals in Adolescents. Paper presented at the 25th International Congress of Psychology.
- 都筑学 1993 大学生における将来目標の内容と特質 日本心理学会第57回大会発表論文集, 481.
- Wadsworth, M. & Ford, D. H. 1983 Assessment of Personal Goal Hierarchies. *Journal of Counseling Psychology*, **30**, 514-526.
- Zirkel, S. 1992 Developing Independence in a Life Transition : Investing the Self in the Concerns of the Day. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 506-521.
- Zirkel, S. & Cantor, N. 1990 Personal Construal of Life Tasks : Those Who Struggle for Independence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 172-185.